2023年7月23日 礼拝メッセージ

聖書:列王記第二9章14～21節

説教:神は見届ける(1)

はじめに

今日の所を見ていく前に、いつものように前回までのあらすじを簡単に振り返ります。預言者エリシャはあるときひとりの仲間を呼び、エフーを見つけ、彼の頭に油を注いでこう言いなさいと命じます。「わたしはあなたに油を注いで、主の民イスラエルの王とする。」ここで「わたし」とは、神ご自身のことですから、神がエフーを王に指名したということです。これを聞いたエフーは、自分の上司であったヨラムに対して謀反を起こすためにヨラムのいるイズレエルに向かいます。それがどうなっていくのかが、今日の場面につながっていきます。最近、ロシアで大統領が信頼していた部下が反乱を起こそうとしたという話しがあったばかりなので、そのことを思い起こしてしまいます。でも聖書は人間の争いの歴史を述べるのが目的ではありません。神の救いを示すために書かれています。では、どこにその救いがあるのか、そのことを考えてまいります。

１　イゼベル

１）三つの疑問

神がエフーをイスラエルの10代目の王としたのには目的がありました。エリシャはエフーに油を注ぐとき、このように語るようにと命じています。7節。「あなたは主君アハブの家の者を打ち殺さなければならない。こうしてわたしは、わたしのしもべである預言者たちの血、イゼベルによって流されたすべての主のしもべたちに血の復讐をする。」

ここで三つの疑問が湧いてきます。一つ目。アハブの妃であったイゼベルはいったい何をしたというので、神からの復讐を受けなければならないのか。二つ目。「イゼベルによって流された血」とあるので、悪いことをしたのはイゼベルのはず。ところがいまエフーが向かって行くのは、イゼベルの息子であるヨラムです。なぜヨラムが巻き込まれなければならないのか。そして三つ目。アハブの家の者とあるのに、肝心のアハブどうなったのか。

２）ナボテの畑事件（列王記第一21章）

まず一つ目の疑問、イゼベルは何をしたのか。数え上げればいろいろあるのですが、その中でも決定的だったことをひとつ挙げます。今日開いているエフーのことからさかのぼっておよそ三十年前に、ナボテの畑事件が起きます。アハブ王の宮殿のそばにあったぶどう畑を、アハブはどうしてもほしくなり、所有者であるナボテに畑を売ってくれるようにと交渉します。ところが、ナボテは信仰者でしたから、神から先祖に約束の地として与えられた畑をお金で他人に売りわたすことなど、たとえあなたが王であっても主にかけてありえないと言って断ってしまう。これを知ったアハブの妻イゼベルは、今で言うフェイクニュースを流し、「ナボテは神と王をのろった」と嘘の証言をさせ、裁判にかけて有罪の判決を下し、合法的に殺して、畑を手に入れる。これがナボテの畑事件のいきさつです。だれもがひどい話しだと思うでしょう。モーセの十戒に照らしても、隣人の者を欲しがってはならない、偽りの証言をしてなはらない、人を殺してはならない、という律法にことごとく違反しています。イゼベルこそ神をのろい、冒瀆していました。

２　神の計画

１）エリヤの嘆き

それで神はイゼベルに復讐をしていく、それはわかった。ではなぜエフーがその復讐の役割を担うことになったのか。たまたまではありません。ナボテの畑事件が起きたちょうどその頃、預言者であったエリヤもイゼベルに大変苦しめられ、物も食べられなくなるほど弱り果ててしまったことがありました。ここまで十分に神に仕えて頑張ってきたのに、仲間の預言者たちは全員虐殺され、自分もいつ殺されるか分からない毎日で、どこにも安らぐ場所がない。神は何をしておられるのか。エリヤは神に訴えた。

２）エフーに油を注げ

これに対して神はこうお答えになります。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油を注いで、アラムの王とせよ。また、ニムシの子エフーに油を注いで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラ出身のシャファテの子エリシャに油を注いで、あなたに代わる預言者とせよ。」（列王記第一19章15～16節）

このなかで神は、エフーをイスラエルの王とするように告げていたことに注目します。あのとき主がエリヤに語っていたことが、およそ三十年後に

時至ってエリシャをとおして今日の箇所にあるように実現していった。そういう流れです。

３）ハザエルをアラムの王とせよ

　でも主が語っていたのはそれだけではない。ハザエルをアラムの王とせよとも語っていました。アラムというのは北イスラエル王国のすぐ北隣に接する国。神がイゼベルへ復讐するというのに、どうしてアラムの王が絡んでくるのでしょう。最初は分かりませんでしたが、今日の箇所に来てやっとつながっていく。14節後半から15節前半。「先にヨラムはイスラエル全軍を率いて、ラモテ･ギルアデでアラムの王ハザエルを防いだが、ヨラム王は、アラムの王ハザエルと戦ったときにアラム人に負わされた傷を癒やすため、イズレエルに帰っていたのである。」

　このハザエルは、すでに8章のところでエリシャが関わる形でアラムの王となり、やがてイスラエル王国に攻め入ります。それでヨラムは戦いに出て行く。ところが、彼は戦いで負傷し前線から退いて、自分の屋敷があったイズレエルに戻るのです。

４）イズレエルという場所

　思い出していただきたい。イズレエルはどんなところであったのか。イスラエル王の宮殿があるところ。と同時に、あのナボテの畑があるところでもある。ここに傷を負ったヨラムが戻って療養していた。エフーは、ヨラムを倒すためにイズレエルに向かいます。ヨラムはそんなことはまだ知らない。なので、エフーが狂ったように馬を走らせるのを見ても、まさか自分のいのちを狙っているとは思いもしない。自ら馬に乗ってエフーを迎えに出て行く。そうやってエフーとヨラムが出会った場所、そこがまさにナボテがかつて所有していた畑、仏教用語で言えば因縁の場所ということです。あまりにもできすぎているので、これは作り話しだろうと思うかもしれません。決してそういうことはありません。神が歴史に介入し、ご自身のご計画を果たすために動いておられるのです。主がアラム王にハザエルを指名したのは、ヨラムを戦いで負傷させてイズレエルにもどすためだった。神はこの日のために、周到な準備をされていたのです。これは次回見ることになりますが、エフーが放った矢はヨラムの心臓を射貫き、あのナボテの畑で死ぬことになります。ヨラムを倒したエフーは、次にはイゼベルを追いつめ、悲惨な死を遂げさせ、こうして神がエリヤを通してアハブに語っていたことが実現していきます。「彼（アハブ）の子の時代に、彼の家にわざわいを下す。」（列王記第一19章29節後半）イゼベルのしたことは、その子どもの時代にまでさばきが及んでいく。そのためヨラムは倒れることになりました。神は人の罪を見逃す方ではありません。必ず見届けて、そのさばきをなさいます。

３　神の救い

１）なぜアハブはさばかれなかったのか

　さてこんな話しを聞かされて気分が爽快という方はまずいなくて、むしろ心が暗くなるばかりです。というのは、かつて自分が犯してきた罪や、今も離れられない罪のあれこれ、そのことが心のどこかでうずき出し、神はあのことも見届けておられるに違いない。私もイゼベルのようにさばかれるかも知れない。そんな心配が心を覆って不安になります。確かに今日の箇所だけ見るならそう思うでしょう。

　しかし最初に挙げた三番目の疑問のことを思いだしてください。今日の話にアハブがなぜ出てこないのか。先ほども触れたように、アハブはナボテを殺して無理矢理にぶどう畑を奪い取った人間です。それを計画したイゼベルがさばかれるのなら、アハブだって同じようにさばかれなければならないはず。それがなぜか出てこない。

２）罪を悔いる者に

　神はアハブを忘れたのでしょうか。イゼベルに復讐するためにこれだけ周到な準備をされる神です。忘れるはずはない。ちゃんとした理由があります。話しはあのナボテの畑事件にさかのぼります。ナボテが有罪判決を受け、死刑になったとの知らせを聞いたアハブが、ナボテの畑を取り上げるために道を急いでいたときのことです。エリヤがアハブの前に立ちはだかり、こう告げた。「神はアハブとその一族をことごとく断ち滅ぼす。」そうしたら何が起きたか。アハブはいきなり自分が着ていた外套を引き裂き、からだに粗布をまとい断食をし、打ちひしがれながらとぼとぼと歩き始めた。つまり、自分が神に対して罪を犯したことを認め、罪を悔いた。そうしたら神はどうされたか。神はエリヤにこう告げた。「あなたは、アハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか。彼がわたしの前にへりくだっているので、彼の生きている間わざわいを下さない。」つまり、アハブは救われたというのです。さばきの場面に一切アハブは出てこなかったのはこのためです。どう思いますか。あんなにひどいことをしたのに、「私は悪いことをした」とひと

こと言っただけで赦される。これは不公平ではないか。確かにこれだけ見れば不公平です。

　でも私たちは神は不公平だと訴えることができるのか。私たちはアハブとどこが違うのか。人は殺していなくても、心の中で人を憎み、のろっているのなら、あなたは立派な人殺しなのだとイエスは語りました。もし神が不公平でなかったなら、私たちはとっくの昔に、さばかれていたはずです。ですから、神は不公平だという前に、不公平なまでにして、私たちを救おうとされていたことに感謝しなければならない。

　でも疑問は残る。神はやはり公平で義なる方なのです。このようにして不公平とまで思われることまでして罪人を救おうとされる神は、いったいどこで公平を取り戻すのでしょう。おわかりですね。私たちの罪は十字架のイエス・キリストが引き受けてくださり、そこでさばかれいます。そこで完全に公平が回復される。この救いをだれが受けるのでしょう。アハブでさえ救われたのです。であれば、罪を悔いる者であるならだれもが救われると言っている。私たちは，この方の救いを信じてこの一週間も歩んでまいります。